蒲田モダンと京都モダン そして馬込モダン

福野　幸雄

最初に

八〇歳半ばになりますが、生まれて育った京都、いわゆる現役時代の海外生活、余生を楽しませていただいている馬込と、大体三分の一くらいづつ居住しています。それぞれの場所で随分お世話になっていますが、大田区蒲田と京都について、その魅力と共通点を眺めて見ます。

タイトルの「モダン」は専門的に難しい用語としてではなく、伝統に埋没したり、呪縛にとらわれず、自由に挑戦的に前進する生活態度や実績があるという程度の意味です。もちろん当会が蒲田「モダン」研究会であることも意識しました。

蒲田モダンと京都モダン

蒲田と京都は、一見、無縁であるように思えますが、かなりの部分が同質で共通点が見られます。共に、地域の内に止まらず、日本一、世界一を目指す気概を持っていて、国際性豊かで、世界に雄飛する気風が強くあります。いみじくも大田区は「国際都市」を標榜し、また大田区ものづくりはナンバーワンよりもオンリーワンを目指しています。

画期的、先見性、進取の気質にあふれ、平たく言えば新しがり屋、「初物喰い」なのです。例えば共に映画産業の先駆となった日活京都撮影所と松竹蒲田撮影所を育て上げ、東洋のあるいは日本のハリウッドと自他共に許しました。

土木事業では京都蹴上インクラインと六郷用水の活用も好例です。

京都の伝統的な芸術を見ても流派や画風が異なっても受け入れる自信が根底にあり、伝統は重視するが新しい表現や試みを取り入れ育てる懐の深さを感じます。たんに伝統を守るのでなく伝統を破壊することが伝統とさえいえます。

ものづくりの面で蒲田が、先端技術を続々と生んできましたが、大正から昭和初頭の新鋭企業群、黒沢商会、大倉陶園、高砂香料、松竹蒲田撮影所、各務クリスタル、新潟鐵工、三省堂などなどは瞠目されます。一方京都も技術集約型の、京セラ、オムロン、堀場製作所、ワコール、島津製作所、日本電産などは京都産業の代表的典型的企業です。巨大な重工業工場ではありませんが、明治以降京都において独自に近代化にとりくんだ伝統からくる技術開発の先

進性、さらには遡って平安時代から現代にまでつづく工芸都市としての蓄積、技術を支える工員のレベルの高さなどの遺伝子によって、現代の京都の中堅企業は高度な技術による商品を生み出しています。

かかる京都と蒲田の工業はローカルマーケットを対象にするだけではなく、全国マーケットにおけるシェアが大きく国際的にも進出している会社が多い。蒲田の工業集積は「ナショナルテクノポリス」とよばれ、大都市工業の成長を先導し貢献したと言えます。

大田区には二つの顔があります。

一つは、上述の蒲田から多摩川河口にいたる産業集積地帯であり、もう一つは、田園調布や山王馬込一帯の住宅文教地帯です。大田区ほどそれぞれがその特長を先鋭にむきだしにして並存している地域はめずらしいと思います。

そして馬込モダン

大田区という呼称が「大」森と蒲「田」を合わせたものですが、両者が先鋭なる対立ではなく、よい意味のある種ライバル意識と環境にあります。源氏と平家、ジャイアンツとタイガースという風に比較するように、このましい関係に思えます。

大田区の大半は江戸の南の街はずれでいわゆる天領乃至寺領であったためか都心を離れているとは言え比較的恵まれた一帯でありました。

「馬込文士村」と称せられている界隈がこの一帯の中央部にありました。大正後半から昭和前半にかけて、文士および芸術家（一応権威ある文学年鑑、美術年鑑に記載されている人物）が最盛時には一〇〇名くらい、徒歩でお直径三〇分以内の地域内にたむろして住んでいた。曰く、川端康成、尾崎士郎、室生犀星、山本有三、宇野千代、佐多稲子、倉田百三、三好達治、山本周五郎、広津和郎、萩原朔太郎、和辻哲郎、北原白秋、高見順、吉屋信子、小島政二郎・・・・（全く順不同）

この界隈の土地柄や地形や人々の風情に、何か一種の落ち着いた温もりと安らぎが感じられます。これが文士や芸術家が一種群れをなして居を構えた吸引力ではないか。

「馬込文士村」はスポンサーや企業の「政策的」誘致ではなく、自然発生的であった。その誘因となった要素は注目できます。

①丘陵地帯である

最近のように一〇分歩くのも疎んじるのと違って、当時は駅まで徒歩二〇―三〇分の距離は住居として不便ではなく、東京から三〇分前後の国鉄大森駅が明治九年にできていたため馬込村は郊外ではあったけれども僻地ではなかった。かつ平坦で無味乾燥ではなく、起伏ゆたかな丘陵地帯で散策散歩などにはまことに適した地形です。

②「出世払い」ができた

親分肌で気風の良かった尾崎とモダンな美人の宇野に誘われて、川端康成、三好達治、萩原朔太郎、広津和郎などが　次々と転入してきた。後年、この地を訪れた宇野千代は当時貧乏で大酒のみの尾崎や文士仲間をもてなす酒や食料品は一年に二度払いの「つけ」で買ったが、かなり不払いになっている。いまからでも支払いたいと、語っていた。（地元郷土博物館学芸員の話）実際、かかる「つけ」買いはもとより、地元の畑の野菜や木になる果物も、文士たちはよく空腹と茶目っ気から、失敬したりもぎ取ったりした。地元の人々はこれを交番に突き付けるような野暮なことはせず、大目にみていた形跡があると、古老は語っています。

このあたりに根付いていた温い人情を感じます。

③地勢の魅力

出世して大家となった大物文士はおおく鎌倉へ移っていったようです。そう言えば鎌倉と馬込の地形上の共通点は、前方に海が広がり、背後は小高い山と変化ある丘が横たわっている。およそ深い思索や鋭い考察は平坦で定規でひいたような環境では生まれ難いのではないか。砂漠や大平原では、明日の食料を求め、征服欲に駆られることはあっても。曲がったりくねったり、登ったり降ったりする地形は、人間が、はにかみや戸惑いや物思いにとらわれる舞台を提供するのではないか。思えば京都の「哲学の道」も、東山の麓の細い小径です。

④西洋式ホテル機能の先駆的利用

大森駅の近くに大正から昭和初年にかけて、モダンな西洋式ホテルが二軒あった。「望翠楼」（一九一二年）と「大森ホテル」（一九二二年）です。文士芸術家が自然に集まり一種のサロンを形成していた。やがてホテルは宿泊飲食のみならず、作品の展示陳列の場所にもなっていった。今でこそ一流ホテルで展示会やイベントが連日行われているが、当時のホテルとしては、先駆的で斬新な一角でした。好むと好まざるにかかわらず「自動車の横行跋扈する現代」は容認せざるを得ないけれども、もっと大切な「心の通う」「人を繋ぐ」「温もりを感じさせる」空間が強調され演出されるべきです。馬込、山王には「自動車を拒否する」道がその為に提供された良きインフラでしょう。

人々を繋ぐ道は、地域の血管です。特に一帯は温もりのある道であったがゆえに文士村や山王を育んだといえます。この魅力ある土地柄の遺伝子は益々良質の地域文化と地勢に恵まれた住環境を提供し続けています。

文士村一帯は、包むような覆うような地形に恵まれ、文士当事者のみならず住民も含めて温和、静穏な人情部落として醸成されてきました。時は移り世は変って現代にいたるも、この一帯に地下水のように流れ沁みている何かがある。一種の吸引力のある土地柄なのでしょう。芸術や文学を育てるハードが与えられた「自然環境」とすればソフトは「人情」や「人間味」です。

終わりに

小生の住まいは馬込の一角の平凡なマンションですが、真ん前に一〇〇本、五〇〇メートルに及ぶ桜並木が我が家の「庭」であり、徒歩三分の「川端竜子記念館」が我が家の「応接間」であり、徒歩一〇分の「郷土博物館」が我が家の「書斎」であることである。徒歩一五分に「池上本門寺」という「祈りの場」があります。贅沢の極みであります。

主要参考資料

「大田区工業ガイド」大田区産業振興課
「馬込文士村ガイドブック」大田区立郷土博物館